
国家成立と周辺地域における自然利用の変容

—アーキエスノロジー的方法論による—考察—

Changes in the Use of Nature with Respect to State Formation and Surrounding Regions

西谷 大

NISHITANI, Masaru

[Abstract] A unique regional culture based on rice cultivation is widely and firmly rooted in China, the Korean peninsula, Southeast Asia and East Asia, including the Japanese archipelago. There is very little meaning in selecting for discussion this fact on its own when seeking to characterize Japanese culture since the Yayoi period as a "rice cultivation culture". Instead, a different perspective is required in order to compare Japan's culture with other regional cultures in East Asia.

One such perspective is the spread and impact of the Chinese style of intensive agriculture. This Chinese style of intensive agriculture has a singular and intensive resource rotation system. It is believed to have spread to both wet zones where rice cultivation prevailed and to dry zones where crop cultivation prevailed while firmly maintaining this man-made rotation system. Shedding light on the essence of this kind of Chinese style of intensive agriculture provides a new perspective and method for understanding the origins of Chinese culture and the process through which it spread to surrounding regions.

One particular method is to undertake a study of a society that is actually involved in the process of change from the perspective of its use of nature and changes thereof, and to explicate the process of change while gaining an understanding of the system of that society's strategies for adapting the way of life of its people. This method entails applying those results to historical cultural changes in an attempt to understand its framework.

During the period from the end of the Warring States period through to the Han period, southern regions in China were forced to accept the Chinese style of intensive agriculture as a result of the increase in population brought about by the huge movement of population from the north of China. Factors for this change from a non-intensive style of agriculture to intensive agriculture were firstly population pressure and the need to increase food production as a means of increasing the maintenance ratio of this population. It is believed that this was subsequently followed by the following sequence: the introduction of new technologies such as those for manufacturing iron implements, increases and surpluses in the production of rice and other crops, changes in the existing use of nature, a shift to a system that was market dependent, the end of self-sufficient use of nature and the change to a Chinese style of intensive agriculture.

1. アーキエスノロジー的方法論

東アジアでは、稲の栽培を基盤として、中国をはじめ、朝鮮半島、東南アジア、そして日本列島という広範囲にわたって、独自の地域文化を作りあげてきた。しかしながら稲作は、中国大陸や朝鮮半島、東南アジアなどの、東アジア地域一帯に広く根づいている農耕技術である。東アジア一帯を広く視野に収めてそれぞれの地域文化の特徴を明らかにしようとするなら、「稲作文化」をもつ

て日本文化の特徴と指摘することに重要な意義があるとは思えない。弥生文化が稲作農耕を重要な社会基礎としたことは間違いのない事実であるが、日本文化を東アジアの他の地域文化と比較しながらその特徴を把握するには、より有効な比較座標を設定する必要があるだろう。

ジャック・パローは、地理学者ピエール・グールの言葉をかりて、中国の農耕を『植物の文明』、西洋の農耕を『動物の文明』と表現した〔パロー 1997〕。つまり、西洋では植物の栽培よりも、むしろ動物の牧畜を重視し、いささか過度な肉への嗜好が存在すると述べている。そしてその西洋の自然改造の方法は、森林を伐採し農耕地を拡大させていく方法だが、その農耕地の内部に栽培植物を育てる畑とともに広大な牧場による牧畜を内在していることを特徴としている。一方の中国大陸ではむしろ植物栽培を重視し、牧畜を農耕内に内部化する方向へと向かう。つまり農耕地内には、西洋にみられる牧場による牧畜は存在せず、家畜も農耕地内部で飼えるブタなどの特定の種別を選別し、閉じこめ内部化していく。中国では養魚池で飼う稚魚を「魚苗」と呼び、村で育てるため、町で買ってくる子豚を、「豚苗」と表現する。この事例がいみじくも象徴しているように、中国的集約農耕を自然利用というイデオロギーからみれば、その特徴は動物の自然性を完全に無視した中国的家畜化にあり、「動物の植物化」、さらにいえば「動物の栽培化」を極端にまで押し進めてきた点にあるといえよう。つまり本稿の視点は、農耕社会を畑作農耕や稲作農耕といった、生態学的基盤としての枠組みで把握するのではなく、動物や植物などの自然をどのように利用するかという、自然利用の生活戦略を指標として、その特徴を考えようとするものである。

中国的な集約農耕が中国大陸とその周辺地域に広く拡散する過程を概観しても、農耕技術がそれぞれの地域における自然的特性を取り込んで柔軟に変化するような所はそう多くはなく、中国的な集約農耕の傾向が維持されたまま、それぞれの地域的環境へと浸透したようである。中国的集約農耕はそれ自体のなかに特異で集約的な資源循環システムを備えており、そのような強固な資源循環システムを備えることで、稲作が卓越する湿潤地帯にも、畑作が優占してくる乾燥地帯にも拡散できたと思えるのである。

このような中国的集約農耕の本質的特徴を明らかにすることが本論の重要な目的の一つであり、またそれを踏まえて、中国文明の起源とその周辺地域への拡散過程を理解するための新たな視点と方法を組立てることを本稿の目的とする。

中国の国家成立と周辺でおこった、自然利用の歴史の変容を考えていく上で、アーキエスノロジーという新たな方法論の枠組みを提示したい。安斎正人は、渡辺仁が提唱するエスノアーケオロジー的方法論である「土俗考古学」を継承発展させ、「生活を一つの活動系のactivity systemとみなし、このような意味で一つの構造体とみなす考え方と、生活の諸側面や諸要素間の相互関係に注意を向ける機能的な見方とを考古学に導入して、縄紋人の「生活」を再構成する」方法を、縄文時代研究に積極的に応用している〔安斎 1998〕。

エスノアーケオロジーは、発掘された遺物を理解する上で、基本的には同様の生態的基盤をもち、現代もまだ伝統的な生活様式を残していると考えられるある民族誌例を取り上げ、その生活の諸側面を解析し、そのシステムを投影して過去の生活そのものを復元しようとする方法である。この方法は、過去の狩猟採集社会などの、素朴な技術を用い、自然に密着して生きる社会の復元的研究には有効である。

しかしこの民族誌的利用方法は、国家周辺地域の変容する生活世界を理解するには応用できない。なぜなら一旦国家が成立すると、その介入によって地域の生態学的基盤など考慮されることなく、生活システムは改変されていくからである。国家が成立した周辺地域では、生態学的基盤による同質性は失われ、むしろ国家を中心としたさまざまな影響力のため、生態学的基盤がたとえ異なっていたとしても、自然利用のあり方が中国的に画一化され類似する現象がしばしばおこる。つまり中国の国家成立後の周辺地域では、生態学的基盤とはまったく異質の自然利用へと変容していることがあり、エスノアーケオロジー的なアプローチでは、生活の復元は難しい所がある。ましてやいまだに考古学で散見されるように、ある民族事例をその背後にある生活文化の構造のなかで読み解くこともせず、都合よく自己解釈するエスノグラフィックパラレル的方法では、国家の周辺でおこる生活の変容過程そのものを明らかにすることは不可能である。

本稿で提示するアーキエスノロジーは、文明とその周辺地域における人間—自然関係の把握を目指している。そうすることによってエスノロジーを考古学＝歴史学に近づけ、歴史的な変容を自然利用の側面から分析する道を拓き、国家とその周辺地域における歴史過程を生態学的な視点にたって理解しようとする試みである。現代の今まさに変容しつつある社会において、そこでの自然利用の変化を、変化に対する適応戦略として把握し、それを踏まえることによって、過去における文化変容の生態学的な意味を汲み取り、歴史解釈におけるより確かな基盤が築けるものと考えている。

本稿では最初に中国的集約農耕の特徴を述べ、国家の領域拡大とともにそれが拡散する様相の一例を述べたい。次に今まさに中国的集約農耕が、非集約農耕地域の社会を変容させつつある、海南島リー族の自然利用について考えたい。そして周辺地域が中国的集約農耕と接することでおこる変容がどのような過程でおこり、社会のシステムを変化させていくかというメカニズムを明らかにし、それを普遍化してみたい。最後に東アジアの中国周辺で、過去繰り返されてきた中国的集約農耕が、周辺地域の自然利用を変容させてきた歴史を考える上で必要になるであろう視点について述べたい。

2. 中国的集約農耕の成立と拡散

中国的集約農耕の特徴と発生

国的集約農耕の自然利用とは具体的にはどのような姿なのか。一言でいえば、家畜や有用植物の限定的利用と、自然への積極的な介入と支配が貫徹した世界だといえる。つまり、自然の動植物を多様に利用し、自然を利用した循環システムを基礎とした農耕とはかけはなれた形態だといえる。

例えば長江デルタでおこなわれてきた中国的集約農耕である「湖羊」と、かつて珠江デルタで広く分布した「桑基魚塘」は、その循環システムに中国的集約農耕の特徴がよく表れている。長江デルタの循環システムとは、次のようなものである。桑の葉をヒツジの飼料として用い、その糞尿は、水田、桑畑の肥料となる。また農業の副産物や厨房からでる人間の食べ残しなどによって、ブタを飼いその糞尿は、やはり肥料として水田や畑に施肥として利用する。さらにカイコの残滓は、ヒツジの餌になり、糸をはいた後のものは、ブタやヒツジの糞とともに養魚池の魚の餌になる。そして最後に、養魚池の泥も肥料として、桑地や畑、それに竹林の肥料になる。

一方、広州デルタで発達した桑基魚塘の「基」とは魚塘（養魚池）の周囲の堤を指すが、土を掘

って養魚池を作り、掘り上げた土をそのまわりの堤とし、その堤の上を畑として利用するものである。伝統的な桑基魚塘は、魚塘で養魚をおこないつつ、塘基で桑（もしくはサトウキビ）を栽培する。そしてその魚塘のそばに豚舎を設けブタ飼養をおこなう。また桑地には冬から春にかけて野菜を栽培する。この時期は水位が低いので斜面に野菜やトウモロコシを作ることができる。桑の葉でカイコを飼い、カイコのサナギ・カイコの糞・ブタの糞尿・野菜の茎葉・トウモロコシの粉末等で養魚をおこなう。そして魚塘の底の泥糞を、桑・サトウキビ・野菜の肥料にするという循環システムである。

この両地域の農業システムは、これまで、畜糞・施肥を媒体として、農業・牧畜・養魚が有機的に結合した中国的な伝統農耕上に成立したと理解されてきた〔郭他 1989〕。しかし、菅豊が、「湖羊」の調査の結論で述べているように、これは「農業・養蚕・牧畜・養魚の生態システム」でありつつ、長江デルタの高い人口圧力が成立背景になっている。そして労働力不足と耕作不足から、必然的におこなわれた限られた資源の循環的な利用を含む多角的農業経営であり、いわば非自然的な「人工的自然循環システム」といえる〔篠原 2002a, 菅 1998〕。

長江デルタや珠江デルタの中国的集約農耕は、農家が農村で自給的生活を可能にするためのシステムではない。都市あいてに、魚やブタそれに、カイコからの絹糸、ヒツジからとれる毛皮など、多くの生産物は都市の市場へと送られる。またこのシステムは、農村という単位での閉じられた循環システムではなく、施肥に使う尿尿は反対に都市から大量に運ばれてきていた。つまり、都市の結びつきを前提とした「都市寄生型人工循環システム」とでもいえる形態だった。

ではこの中国的集約農耕の特徴である選択的な家畜の利用と循環システムは、いつどのように発生したのだろうか。甲元真之は、新石器時代において中国にはいくつかの経済類型が存在したとし、新石器時代後期には各地域の生態に適した農耕がおこなわれたと述べる〔甲元 1992〕。紀元前3000年段階での中国の経済類型は、黄河流域の畑作を中心として家畜や狩猟などをおこなう多角的経済類型、長江流域の稲作栽培を中心として家畜飼育に比重をかけない選別的な類型、生産経済以前の狩猟、漁撈、採集といった自然依存の経済を根底にし、補助的な食糧として多様な穀物栽培と家畜飼育をおこなう、東北アジアにみられる網羅的な類型に分けることができるとする。

中国の新石器時代の農耕は、地域によって栽培植物や利用する家畜の違いは存在したとしても、中国的集約農耕の特徴としてあげられる、非常に選別化した家畜や特定の栽培種だけに依拠した農耕とは考えられない。むしろ栽培植物や家畜、狩猟や採集によって多様な動植物を利用しており、新石器時代の中国には中国的集約農耕の存在を暗示するような考古学的証拠は見られないのである。

では中国的集約農耕は、いつごろから始まったのか。少なくとも、戦国末期から漢時代には、出現していたと考えられる。その理由は、中国的集約農耕の特徴としてあげられる、農耕内部での家畜の舎飼いが、おそらく戦国末期から漢時代にかけて、出現するからである。劉敦愿は、中国において戦国時代から漢時代にかけて、中国華北の西安・洛陽などのいわゆる“内郡”では、農耕の進展に伴って耕作地が拡大し、家畜を放牧するには条件が悪くなるという〔劉1986a・b〕。そして定住農耕民に適したウシ・ウマ・ブタなどの舎飼いと、厩肥による施肥の結びつきが展開すると主張する。さらに匈奴との戦争によるウマなど家畜生産の必要性が背景に存在することと、流通経済の

発展によって家畜の舎飼いに必要な飼料が、周辺地域から得やすかったことを成立の条件にあげている。

さて中国的集約農耕の考古学的証拠として最も顕著なものは、ブタ便所であろう。ブタ便所とは畜舎に便所を併設し、人糞を餌としてブタを飼養する施設である。ブタ便所は時代が下り、後漢以降は、厩肥の生産と耕作地への施肥とが積極的に結びつく。しかしその成立の要因は、黄河中下流域で、戦国期の農耕進展による家畜飼養と農耕を両立させるため、家屋内の便所でブタの舎飼いをおこなうことにあったと考えられる。その目的は、飼料の一部を人糞やその他の厨房の雑物に置き換えることで、飼料に関わるコストを削減することであり、中国的集約農耕の循環システムの最も特徴的な方法の一つだと考えられる〔西谷 2001a〕。中国的集約農耕は、稲作農耕地帯や畑作農耕地帯といった生態学的基盤に成立要因があったのではなく、制約された生態的環境のなかで、資源をいかに有効に利用しつつ、土地生産性をあげ人口支持率を高めるかを目的とした結果であると考えられる。

中国的集約農耕の拡散

中国的集約農耕の証拠を、考古学的にブタ便所を一つのメルクマールとすると、中原で発明されたブタ便所はやがて中原以外にも拡散していく様相がうかがえる。

その拡散は生物地理学的分布の枠に収まることなく、稲作農耕地帯である長江中下流域や中国南部へと拡散していく（図1）。

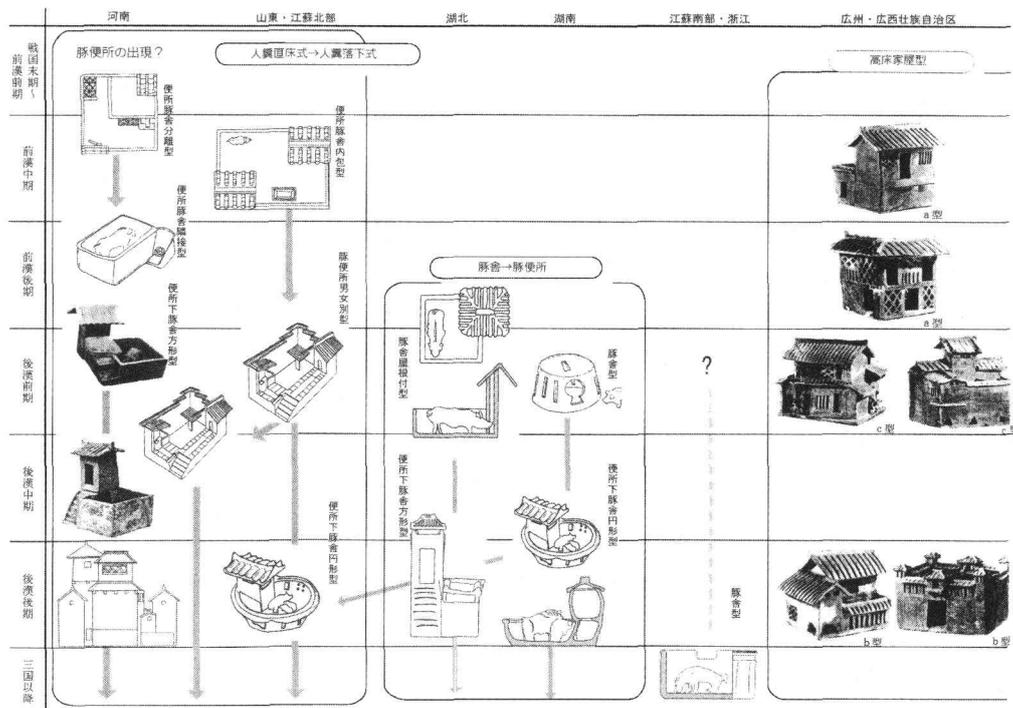


図1 ブタ便所の編年概念図

長江デルタの様子を簡単に述べてみよう。長江下流域江南地域の漢時代の農耕は、火耕水耨と呼ばれる農法であったといわれる。火耕水耨は、『史記』『漢書』『塩鉄論』に記事があり、西嶋定生・天野元之助・米田賢次郎によってその具体的な農法について論争されてきたが、意見の一致をみていない〔渡部・桜井 1984〕。しかし人口が希薄な上に、階級が未分化の社会か、あるいは暑熱の低湿地でおこなわれた自給自足的な農耕である点と、技術的には焼畑でありかつ水田である点は共通している〔渡部・桜井編 1984〕。

長江下流域の江南地域における、豚舎・ブタ便所の出現は西晋時期まで下る。つまり稲作栽培地帯において、家畜とりわけブタが多く飼育されるようになるのは、ブタのもたらす肥料を水田に投入することで生産性を高める段階に至ってからであり、それが一般化したのは長江流域では漢代以降のことである。

では先ほど中国的集約農耕の例としてあげた、珠江デルタではいつごろから中国的な自然利用がおこなわれるようになり、その成立要因はどこにあったのだろうか。中国的集約農耕は、漢代以降この地域に大きな影響を与えるようになると考えられるが、まず前時代の新石器時代の様子から概観してみたい〔西谷 1995〕。

この地域の新石器時代は、その分断された生態環境に特徴があるといえる。海と接する沿岸部、デルタ上端部とマングローブに覆われた三角州地帯、内陸部の丘陵に囲まれた比較的面積の狭い盆地や平野、これらの生態環境によって、新石器時代の文化は、それぞれに個性がある。この地域の新石器時代の様相が具体的に把握できるようになるのは、新石器時代後期の紀元前3000年紀前半の後沙湾文化の時期になってからである。遺跡は11世紀以降は桑基漁塘の舞台となるデルタ内部には形成されず、島嶼地域や海岸部の砂丘上に立地する。文化層は薄く、出土する遺物も少ない。そのため季節的なキャンプサイトとして使われていた可能性が高い。しかしなぜか遺跡から動植物遺存体がまったく出土しないため、その生業の実態はわからないことが多い。一方珠江デルタ上端の汽水域では、銀州遺跡第1期に代表されるように、遺跡は河川を望む微高地上に位置し貝塚と平地住居を伴う。新石器時代後期の紀元前3000年紀後半になると、長江下流域の良渚文化の解体に伴って、稲作栽培の分布も拡大をはじめると、この時期の代表である石峽文化では、良渚文化系の遺物の代表である玉器を出土するなどの特徴とともに、稲作栽培もかなり積極的におこないつつ、イヌやブタなどの家畜も出現する。しかし貝塚も依然として発達しており、水産物の利用も盛んだったことがわかる。

時代が下り、商周時代並行期に属する東張遺跡では、稲藁や収穫具である石包丁や有段片刃石斧など、長江下流域で出土するのと同じタイプのものが出土する。茅崗遺跡（前2000～1500年）で、当時の珠江デルタ周辺の低湿地に立地する高床建築の遺跡が発見されており、木柱が地面から立ったままの状態で見られている。遺構の木柱の配置から、3棟の建築が想定されている。これらの建物の周囲の泥のなかから、土器や石器などとともに、カキ・ハマグリなどの貝類、ギンナン・サンザシ・カキの種などの植物の遺存体、それにブタ・ウシ・シカ・ヒツジ・ゾウ・ネズミ・カメ・ワニ・魚類などの動物骨が大量に出土している。

この地域の生業は、新石器時代後期の終わりには確実に稲作栽培がおこなわれるようになり、ブタなどの家畜も飼育されていたと考えられる。しかし、遺跡の立地は珠江上流の盆地や、デルタ上

端の汽水域、または海岸部の砂丘上に限られるなど、後の水田開発や桑基漁塘の中心になる珠江デルタ内部の開発はおこなわれていなかったと考えられる。しかも稲作栽培をおこないつつも、狩猟採集などの生業もかなりの比重を占めていたと考えられる。当時の自然利用の形態は、中国的集約農耕とは異なる、水田（おそらく焼畑も存在したのではないかと予想している）と狩猟採集という、自然を複合的に利用するという生活適応戦略だったと考えられる。

珠江デルタ地域の自然利用が劇的に変化するのには、戦国末期から漢代にかけてである。その考古学的証拠として、中国的集約農耕の一つの指標としたブタ便所明器が、広州を中心とした漢墓から数多く出土することがあげられる〔広州市文物管理委員会・広州市博物館 1981, 西谷 2001a〕。

広州漢墓では、前漢の中期以降からブタ便所が出土するようになる。その型式は、高床家屋の2階の一室を便所にし、その下の1階部分を豚舎にした、他の地域にはない特異な高床家屋式ブタ便所である。このブタ便所は、どのような経緯から成立したのだろうか。

『史記』によると戦国時代の広東・広西省一帯は、越・蒼梧の国と称した。前214年、始皇帝がこの地域を50万の軍隊でもって、5年間かかって制圧し桂林・象郡・南海などの諸郡を設置した。その際50万の軍隊も、この地にそのまま残留したといわれている。秦滅亡後は、中国全国が争乱状態におちいった。前207年、混乱に乗じて南海郡尉の趙佗が、桂林・象郡を攻撃し武王と称して南越国を興し番禺（広州）を都とした。

漢もその前半期には南越の分権的統治を認めたが、漢の武帝は大軍を派遣して第5代の王である建徳や呂嘉らを殺し、南越は五代97年で滅びた（前111年）。そして武帝は中国の南部地域とベトナム一帯に交趾九郡を置き、ハノイ付近の地を交趾部の治所に定めた。

この歴史的事実を参考にすると、戦国末期から漢時代にかけて、珠江デルタでは華北地域からの人口の流入がおこなわれていることがわかる。秦始皇帝の軍事行動に伴う大量の軍隊の残留であり、武帝の南越制圧に伴う漢の天下統一の完成と、広州を中心とした漢人の移住である。中国的集約農耕の移植は、地元の在地社会が希求したものではなく、おそらくこうした移住者に伴っておこなわれたのであり、最終的には珠江デルタを桑基漁塘の世界へと変容させていく。戦国末期から漢代にかけて、この地域を呑み込んでいった集約農耕は、従来からこの地の自然を利用して、生活を営んでいた人々の生活に多大の影響をおよぼし、そしてその社会そのものを変容していったであろう。自然利用という観点からみれば、従来の在地社会がもっていた、自然を複合的に利用するという生活適応戦略とはまったく対局に位置する集約農耕へと変容していく過程であったと考えられる。

では、中国的集約農耕とは対局にある多様な自然利用と循環システムとは、具体的にはどのような姿を描けばいいのだろうか。

3. 自然利用のジェネラリストとその変容

地理的・生物的多様性の利用と共生循環システム

中国海南島リー族の焼畑を中心とした農耕を取り上げる目的は、ただパラレルに時代を飛び越して、中国的農耕システムと対局にある自然利用と農耕の様相を単純に比較するためでない。篠原徹が述べるように、海南島リー族のおかれた現状は、「日本や中国のみならず、環境問題が大きな問題となっている地域とは、19世紀から20世紀に成立した国民国家の版図の周辺であり、国民国家

が範囲の確定という政治的な理由ばかりでなく国民国家にとって発展の遅れた地域として最後に残された場所」としてとらえられる〔篠原 2001〕。リー族農耕文化は、かつて水田と焼畑および狩猟採集という、複合的な生業の組み合わせから成立していた。そして、今まさに経済的な変化のみならず環境の変化と民族文化の変容が起きている。現在海南島のリー族の村で起こっている現実を、自然利用という視点からみれば、およそ2000年前に国家周辺におこったことと同様に、中国的集約農耕の膨張が、非集約的農耕の世界を変容させていく姿としてとらえることが可能だからだ。そこで、まずリー族の自然利用のジェネラスリトとしての姿を描き、それがどのような形で変容しつつあるのかを考えてみたい。⁽¹⁾

まず五指山市初保村の事例を中心に、自然を多様に利用するという生活適応戦略の具体的姿を述べてみよう〔西谷 2001c〕。⁽²⁾
⁽³⁾

初保村の生活適応戦略は、大きく2つの方向性があると考えられる。一つは、地理的環境の多様性に依存した生活適応戦略である。他の一つは、生物多様性に依存した生活適応戦略である。初保村の人々は、自然を多面的、多目的に利用し生産性を維持しつつ環境を破壊せず在地リスク回避をおこなってきた。リー族の多様な自然利用のあり方を探るのに、村の耕作地をゾーニングすることからはじめた。というのは、村の耕作地も河川沿いと山の斜面に展開しており、しかも河岸段丘から山の斜面を見事に垂直利用する点に特徴があり、谷の両側を南北に走る山のほぼ山頂までを、なんらかの形で利用しているからである。この垂直方向の利用は、生業によって使いわけている(図2)。

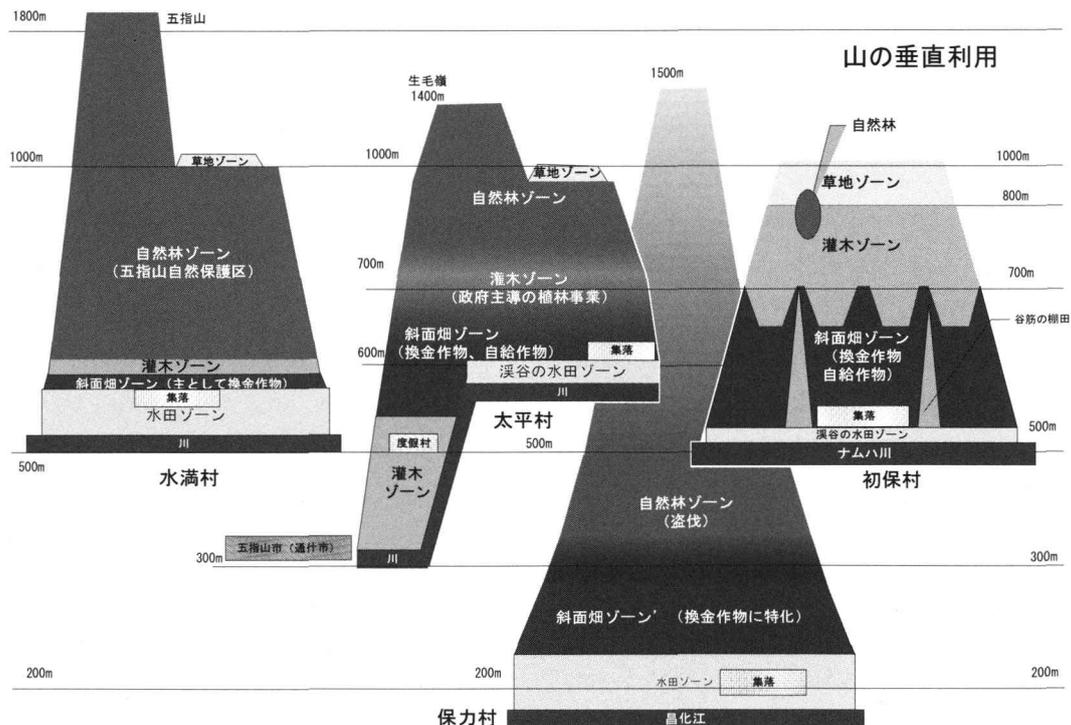


図2 初保村の生活適応戦略の概念図

ゾーンは、ナムハ川沿いの河岸段丘上と谷筋に棚田を展開する水田ゾーン、集落ゾーン、その上に展開する斜面畑ゾーンと灌木ゾーン、さらにその上の草地ゾーンの5つに分類した(篠原2001, 西谷2001)。斜面畑とは、従来焼畑がおこわれていた山の斜面に開かれた耕作地のことであり、1993年以降の焼畑禁止に伴って常畑化している。

それぞれのゾーンの特徴をかいつまんで述べてみよう。集落ゾーンは山麓にテラス作り、その周辺を利用している。集落周辺の菜園畑もこのゾーンに含まれる。水田ゾーンは、河岸段丘上と水が豊富な谷筋に棚田が作られている。斜面畑は、現在新たな森林の伐採は法律上禁止され拡大はできない。しかし斜面畑は非常によく開発されていて、バナナ、キャッサバ、トウモロコシ、ヘチマ、ゴマ、イモ類、豆類、それにリー族の伝統的な酒造りに欠かせない山欄稲(陸稲)など、さまざまな作物が植えられている。

その上の灌木ゾーンは、以前は焼畑と牧草地にするため山焼きをして1年生の禾本科植物の生長を促していたが、山焼きの禁止で現在は灌木林になっている。さらにその上は、かつて山焼きをした草地帯と自然林が混在している。しかし現在は、林業局によるコウヨウザンと馬占想思樹の植林がおこなわれている。灌木ゾーンは、水牛・黄牛の放牧地であり、自然林は建材や結束材(紅籐や白籐)などの採集ゾーンでもある。

彼らの固有の自然利用の特徴を、もう少し具体的に述べてみよう。谷筋は谷を媒体とすることで、一つの家の水田・斜面畑・灌木・草地ゾーンを集中させて、配置してある。つまり、初保村のナムハ溪谷に広がる、いくつかの谷筋には、ある一家とそのごく近い親戚が管理し、水田耕作・畑・有用植物利用と採取・水牛、黄牛の放牧、そして野生動物狩猟までが、一つ谷筋でおこなえるという、多目的に効率よく利用できるようにそれぞれのゾーンが配置されている。これが地理的多様性に依拠した、生活適応戦略である。

解放前の焼畑は、自給作物を中心に栽培してきた。初保村では焼畑をアンといっている。伝統的なアンは、数年使って最低5年は放棄する。そこにみられる作物は、陸稲(山欄米)・サツマイモ・カボチャ・キマメ・綿・ゴマ・トウモロコシ・ピーナッツ・ヘチマ・インゲンマメ、それにヒエ・アワ・シコクビエ(現在は植えられていない)等等にさまざまなものを植えていた。しかも焼畑では、これらの作物を一筆の畑に一種類だけを植えるのではなく、例えば山欄稲やトウモロコシ、それにサツマイモなどを混作する。この多様性が、干ばつや害虫などの予期せぬ一つの作物の不作によるリスクを、最小限にとどめるための工夫だったと考えられる。つまり、これが生物多様性に依存した生活適応戦略ということになる。

中国的集約農耕の動物利用が、非常に選別的で「動物の栽培化」ともいべき徹底した管理のもとに飼養されるのに対して、リー族の動物利用は生物の多様性に依存している。そして中国的集約農耕の特徴であると述べた「人工的自然循環システム」とはまったく異なる、自然に依拠した「共生的循環システム」ともいべき生活適応戦略を見て取ることができる。この側面を、リー族のブタ・水牛・黄牛、そして野生動物狩猟の実態から明らかにしてみたい。

従来リー族のブタの飼い方は、村内での放し飼いが中心だった。畜舎を作ることもなく、朝に飼い主の家で、残飯やイモやタロイモの茎や葉などを与えられた後は、村内やその周辺を歩き餌をさがす。村人の大便も立派な餌である。水牛・黄牛は、灌木ゾーンから草地ゾーンで放牧されていた。

水牛は、人民公社時代以前の1950年代まで、婚資として重要な役目をはたしていた。また黄牛は、貴重な現金収入の手段の一つであったし、所有していること自体が、財産の意味を有していた。水牛は、年2回の水田の耕起（犁と踏耕）に使用する以外は、とりたてて他に重要な役目はない。その飼いは、各家の水田や斜面畑のどこかに決まった場所があり、ここで1週間に1度くらいの割合で、異常がないかの見回りと、塩をたずさえ水牛や黄牛に与えるという飼い方である。村によっては村内に厩舎をもっているところもあるが、初保村のように周囲に草地ゾーンがあり、放牧が可能な場合は、ほぼ年間を通じて水牛も黄牛も山で放牧する。

さてこの草地ゾーンは、放牧という機能だけでなく、村にとって絶対に必要な建築材料や、狩猟の場も重なるという、多様な利用側面をもっていた。まず毎年2～3月になると、必ず山焼きをおこなっていた。こうすることで、春になると黄牛や水牛が好む丈の低い柔らかい草が毎年はえてきた。また秋以降1～2月には一斉にはえたチガヤを刈り取り、これが家の屋根葺きに使われていた。チガヤがはえた草地ゾーンは、恰好の狩猟場になる。イノシシは草地ゾーンに巣を作るし、センザンコウやハリネズミなどの小動物も、こういったチガヤになった草地ゾーンを好むという。さて以前の山焼きは村人が自由におこない、村全体で一斉におこなうことはない。このとき土地を少しづつ焼いていくため、自然とイノシシやキョンなどはまだ山焼きがおこなわれていない場所に逃げ込む。そのため狩猟は、野生動物が逃げ込んだ場所を囲んでおこなうという効率のいい方法であった。つまり草地ゾーンの機能は、黄牛や水牛を放牧するだけでなく、山焼きをすることで狩猟の場と建築材料の収穫場としての機能も果たしていた。

リー族は、イノシシやキョンなどの大型野生動物以外にも、小動物や野生の動植物を徹底的に利用してきたことが明らかになっている。リー族が利用している動物類の種類を列挙してみよう〔梅崎・良・伊藤・蔭・西谷 2001〕。水田では、アオガエル・イナゴ・エビ・オタマジャクシ・カニ・クモ・ケラ・コオロギ・タニシ・トンボの幼虫・ネズミ・などが食料として採集されている。また斜面畑では、トリ（飛ぶものはすべて食べる）・キツネ・センザンコウ・コウモリ・タヌキ・トカゲ・ヘビ・リス・アリの卵（樹上で巣をつくる種類）、そしてイノシシ・キョンなどの大型動物も、焼畑内部の栽培化されたサツマイモやキャッサバなどを食べにくる。野生動物にとって、草地ゾーンや焼畑は恰好の餌場になっており、いわばかつての焼畑（現在の斜面畑）とは一種の野生動物をおびき寄せた自然界に作られた「大きな罠」であり、この大きな罠の周辺で、実際に野生動物を捕獲するくくり罠やトラバサミやそれに仕掛け銃などが、道具としての「小さな罠」だといえる〔西谷 2002a, 2003a, 2003c〕。焼畑などによってくる小動物の狩猟には、害獣駆除と食料確保という2つの意味があったが、小動物狩猟は、動物性タンパク質確保という点では、イノシシなどよりもはるかに日常的で、かつ捕獲に投下する時間やエネルギーも少なくすむという利点があることを指摘しておきたい。

動物類だけでなく、水田内や水路の雑草も食用としている。例えば水満村の調査によれば、水田周囲の畦・水田内・水路で採集される植物は40種類を数えるが、そのうち27種類が食料として食べられている（梅崎2001）。これは水田に作られた自然の「野菜畑」ともいえる仕組みである。

いずれにしても、リー族のジェネラスリットとしての動植物利用は、その自然の多様性に依拠し、それを巧みに利用することにある。例えば「大きな罠」ともいえる焼畑（斜面畑）という自然的な

人為環境も作りはするが、それは決して自然に積極的に介入して管理するという方法ではなく、むしろ自然に依存したゆるやかな「共生循環システム」だったといえよう。

自然利用の変容

解放後の土地所有の変化，人民公社時代の集団化，1982年以降の生産請負制度による生産組織の激変，そして1993年に始まる封山育林政策に伴う焼畑の禁止や，草地ゾーンでの植林事業などの政策によって，リー族の従来の生活は今大きく様変わりしようとしている。リー族の自然利用の変容は，以下のような過程を経つつあると考えている（図3）。

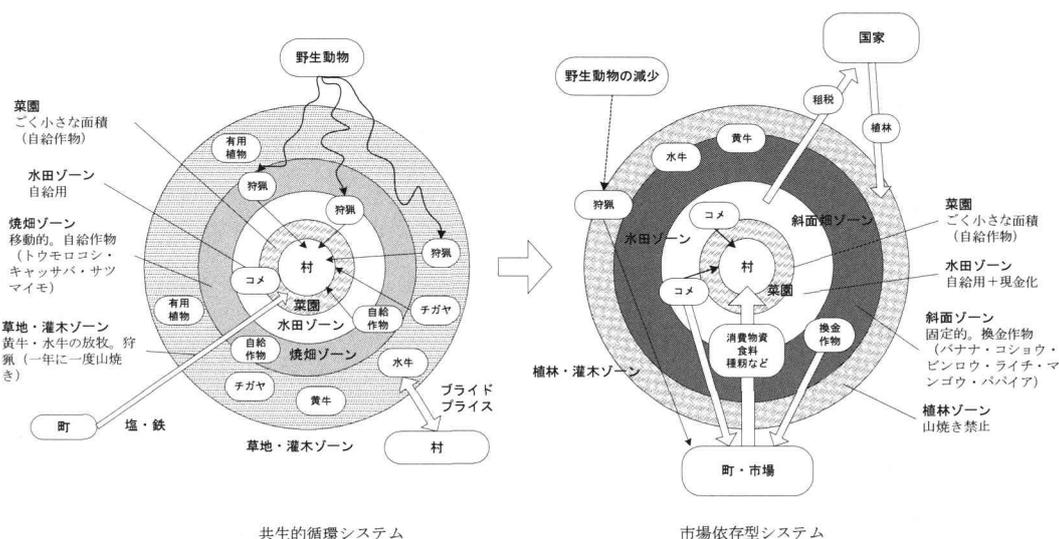


図3 リー族の自然利用の変容

1. 多様な植物利用から特定栽培作物への特化
2. 共生循環システムから市場依存システムへの変容
3. 欲望の創出と自然利用のスペシャリスト化

1950年代以前のリー族の農耕は，非集約農耕的なほほ自給自足的形態だったと考えられる。この状況が大きく変化するのは，1960年代から70年代にかけての集団化の時代だった。国中で食料増産がさげばれた。中央からみれば周辺の「僻地」に位置するリー族の山間の村でも，焼畑に自給作物ではない，政府へ納めるためのトウモロコシ，パパイヤ，マンゴウ，コショウなどが計画的に植えつけられるようになる。

1982年以降の生産請負制に伴って，村の自然利用は大きく変化する。特に1980年代終わりから，ハイブリット米の植えつけ開始が，村の自然利用を大きく変化させることになった。ハイブリット米は在来種と比較して，およそ2倍近くの収量が得られるという夢のような品種だった。初保村でも現在2期作の両時期ともに，このハイブリット米を植えている。コメの収量が飛躍的にあがり，余剰米を市場に売りに出すことが可能になった。さらに従来焼畑で作っていた自給用のサツマイ

モ、ヤムイモ、タロイモ、山欄稲などの作付け面積を減らし、他の換金作物を植えることができるようになる。

これが、「多様な植物利用から特定栽培作物への特化」である。食料増産の背景にあるのは、中国の集約農耕的なイデオロギーである。リー族が固有にもっていた焼畑に適合的な多様な自給作物を重視せず、収量だけを重視した単一品種を植える。確かに収量はあがり、かつて日常的にコメを食べられなかったリー族の村でも、毎日3食コメが食べられるようになり、国家にとっても穀物の増産が可能になる。しかしハイブリット米は在来種のように種籾を残しても次年度は育たず、毎年政府から籾を購入しなければならないし、水と肥料と農薬を大量に必要とする品種である。つまり、生産性を向上させようとすればするほど、町からこうしたさまざまな生産の基本に関わる物品をすべて購入しなければならないという、外界の市場にたよる循環システムの輪に入ることになる。

では次の段階として、何がおこったのか。初保村では1992年から2年かけて村人総出で、隣村までのおよそ2キロの細い獣道のような山道を広げバイクやトラジートラックが通れる道を開通させた。目的はバナナを植え、それを町に売り現金を獲得するためである。この村の歴史とほぼ同時に、封山育林政策（1992年）に伴う焼畑の禁止が政府によって決定される。目的は、「生態環境保全」である。そして従来の草地ゾーンには、馬占相思樹（ユーカリの仲間）とカリブマツとコウヨウザンなどを植林するようになり、かつての草地ゾーンでの山焼きを全面的に禁止されてしまう。そのため草地ゾーンのもつ、放牧・家屋の材料（チガヤ）・狩猟といった多面的な機能が奪われつつある。山焼きが禁止されたため、現在では草地ゾーンで禾本科植物が繁茂してしまい、ウシや水牛の餌不足に陥るだけでなく、イノシシやキョンまでもがあまり寄りつかなくなってしまう。餌や屋根ふきよのチガヤが不足するだけでなく、従来動物タンパク質として重要であった小動物をはじめ、イノシシやキョンなどの野生動物狩猟場としての機能が山焼き禁止と植林のために失われようとしている。

バナナは、多年草の植物である。斜面畑（従来の焼畑）でのバナナなどの特定の換金作物への特化は、従来の焼畑がもっていた、年単位でおこなう多面的で多様な利用方法によるリスク回避という機能は失われてしまう。谷筋は谷を媒体とすることで、水田・斜面畑・灌木・草地ゾーンを効率よく多目的に利用してきた場である。自給作物を栽培してきただけでなく、狩猟や灌木林内の有用植物の採取場所でもある。この谷筋を、換金作物に特化してしまうと、これらの連鎖を断ち切ることになる。このようにコメの増産は、山欄稲（陸稲）・サツマイモ・タロイモなどの作付け面積を減少させる作用に働いたし、植林は焼畑がもっていた「大きな罨」機能を低下させてきている。つまり従来彼らが作りあげてきた、共生循環システムは、町の市場を目的とした現金獲得のためのシステム、つまり市場依存システムへと変容する方向へと動いている。

そして1980年代の終わりに、もう一つ大きな変化がおこった。中華鍋と化学調味料の普及という料理革命である。この革命は、リー族の自然利用の変化と深く関係していると考えられる。化学調味料の使用頻度が高い傾向は、今回調査した各村に共通している。保力村では1日およそ化学調味料を、一人あたり10gも使う〔蔣 2001〕。従来のリー族固有の調理法は、塩煮か焼くだけだった。リー族の従来の料理は、家畜だけでなく、イノシシ、キョン、センザンコウ、ネズミなどの動物やケムシ、カエル・アリの卵、ケラ、オタマジャクシなどの昆虫類や爬虫類などと、可食雑草や野菜

を組みあわせて煮る方法である。単純にみえるが、実は動物性の食材と野菜とで、味のバラエティを広げることが可能である。反対に、野菜を塩で煮るだけでは、味気なく、動物性の肉がなるべくなら必要であり、それが日々のさまざまな小動物狩猟と結びついてきたと思われる。ところが、化学調味料は、彼らにいわせるとブタやキョンの肉の味であり、動物性の食物がなくても肉の味がするまさに魔法の調味料だった。つまり化学調味料が肉の代わりとして重宝されたため、リー族の村で爆発的に普及していったのではないかと予想される。そのため、イノシシやキョンなどの大型の野生動物は別にしても、昆虫類やネズミなどの、かつては日々食していたであろう小動物への依存度が低下していったのではないかと考えられる。ここにも町の市場とつながることで、新たにもたらされる化学調味料という一見小さな調味料の袋も、実は村の共生循環システムに大きな影響を与えたと考えられる。

こうした、共生循環システムから市場依存システムへ変容するのに伴って、村の自然利用と生活世界に顕著に表れつつあるのが、3番目に提示した「欲望の創出と自然利用のスペシャリスト化」である。現金収入と町での新しい生活情報は、新たな欲望を創出する。村で、現在一番に欲しいものといえば、茅葺きの家ではなく漢式のレンガ造りの家だという。村における家財道具調査の結果、換金作物への転換によって現金収入が増大し、それに伴っておこった変化は、生業の基本に関わる農具などへの投資ではなく、むしろ娯楽製品や足代わりのバイクなどを購入することである〔西谷2001d〕。リー族の村では、ラジオ、テレビだけでなくオーディオ製品や、裕福な家はバイクも所持している。現金収入が一挙に増大した結果として彼らが購入するのは、楽しみという生活の周辺部分や交通手段がまず変化している。

欲望によって生まれた購買意欲を満足させるには現金が必要であり、そのための方法が自然利用の「スペシャリスト化」である。つまり村内でこれまでのように、一律に誰でもが植えていたバナナに頼るのではなく、まだあまり植えられていない、市場価格の高い、高収入が得られる換金作物を植えようとする。例えば、初保村では、バナナやコメよりはるかに高収入が得られる、コショウ・ゴムなどを斜面畑に植えるようになった。また以前は野生動物狩猟は村人の誰もがおこない、しかも狩猟された動物はほとんどすべて村内で消費され、特に大型のイノシシやキョンは、村内で共食されていた。しかし現在では、野生動物狩猟の目的は、町の市場で売って、現金化することである。しかも猟の得意な村人だけが従事するという、スペシャリスト化が進行している。そして狩猟された動物は、村内でさえ売り買いされるようになった。

今おこりつつあるのは村内の個人のスペシャリスト化だけでなく、各村ごとの自然利用のスペシャリスト化である。1999年から2002年にかけて調査した、他の3つの村では、例えば、保力村では、焼畑の換金果樹への常畑化と自然林での狩猟・採集活動から木材伐採への変化によるスペシャリスト化が村の生活を変容させつつある。

水満村は、中国でも有名な五指山が背後に控え、市は周囲が五指山を観光地としてあるいはリゾート地として発展させようとしている。かつて水満村が焼畑や放牧をおこなっていた場所は、自然保護区指定によって、放棄されてしまった。そのため現在は、他村と比較して、一戸あたりの水田面積が多いことを利用して、生業を水田だけに特化させている。五指山市に最も近い太平村は、都市近郊に近いため、他村よりはるかに情報料が多く、それを活用していわゆる近郊菜園化にスペシ

ャリスト化した生活適応戦略をあみだしているように思われる〔伊藤 2004〕。たとえば、1年性植物の作物を多く作り、市内の市場の売り、現金収入にする。

リー族が今たどっている道は、集約農耕を是とする側からすれば、かつての生活と比較ならないほど現金収入が増え豊かになったかのようにみえる。しかし視点を変えれば、彼らが固有にもっていた共生循環システムは確実に壊されつつあり、社会システムや人間関係までもを変質させつつある。そして彼らの自然利用だけでなく、実は彼らがおこなっていた環境保全までもを変容させつつある。そのはじめは特定栽培への特化にはじまり、それが村のシステムを市場依存型へと変容させていった結果だと考えられる。

4. 非集約農耕から中国的集約農耕へ

掛谷誠は非集約的農耕と集約的農耕を対比させ、その特徴を端的にまとめている〔掛谷 1998〕。

非集約的農耕	集約的農耕
低人口密度型農耕	高人口密度型農耕
「労働生産性」型農耕	「土地生産性」型農耕
多作物型	単作型
移動的	定着的
共有的（総有的）	私有的
自然利用のジェネラリスト	自然利用のスペシャリスト
安定性	拡大性
最小生計努力（過小生産）	最大生産努力（過剰生産）
平均化（レベリング）	差異化
遠心的	求心的
分節的	集権的

中国的循環システムの特異性は、すでに述べたように自然を多様に利用するのではなく、自然の資源、栽培食物や家畜を限定的に選択し利用しつくすところにある。

ブタ便所、桑基漁塘、それに「湖羊」などの農業形態は、一見すると自然の循環システムを利用しているようにみえる。確かに循環システムではあるが、それは自然の力を利用したというよりも、むしろきわめて人工的に自然を加工して作りあげた、限定的な自然利用ともいべき「人工的自然循環システム」だった。

篠原徹はリー族の自然環境のあり方を、焼畑の外部（周辺より遠い）の二次林や自然林を、「自然的な自然環境」と呼び、焼畑を「自然的な人為環境」と呼び、自然と焼畑のあいだにはこれを連続させてつなぐ植物が存在し、それを馴化することで栽培植物が誕生するのではないかと仮説をたてている。つまり生物の多様性に依存した生活戦略があつてはじめて、栽培植物が誕生するのではないかという指摘である〔篠原 2002a, 西谷 2003b〕。おそらく、中国的集約農耕の「人工的循環システム」の閉じられた自然環境内では、確かに選別化された家畜や限られた栽培植物内での品種改良は可能であろう。しかしまったく新しい植物の栽培化は不可能であり、このことは実は集約農耕は一見多様にみえても、生物の多様性を利用するという側面からみた場合、その発展性に自ずと限界があるということの意味している。

一方リー族の自然利用は、焼畑といった自然的な人為環境も作りはするが、それは決して自然に積極的に介入した管理はしておらず、むしろ地理的環境と生物多様性の上に成立した自然との「共

生循環システム」だといえる。その姿は中国的集約農耕にみられる、選別化した特定の栽培植物を植えて土地生産性を高めるよりも、焼畑にはさまざまな種類の栽培植物を植えリスク回避をおこない、むしろ安定性をもとめる。そして焼畑自体が、野生動物をおびき寄せる「大きな罠」的機能を有していた。また集約農耕からは、土地の無駄づかいとしか理解されないであろう草地ゾーンは、放牧地、狩猟、建築材料の収穫といった複合した機能をもった「場」であり、さらに自然破壊にしかうつらない山焼きは、この「場」を作りあげるために是非とも必要な作業だった。

さてこうしたリー族固有の自然利用が、中国的集約農耕のイデオロギーの影響によって変容する姿を描いてきたが、その最大の要因は特定栽培（ハイブリット米）が導入されたことで、多作物型が単作物型に変化し、集約農耕の特徴である土地生産性重視と過剰生産型へとまず変容したことにあがる。そして、かつては移動的であった焼畑が固定的な斜面畑へと変化するとともに、自給的作物面積が減り換金作物への移行がはじまった。しかし特定作物への移行によって、高収入を得るためにはさらに資本投下が必要でありそのためには現金収入が必要になる。市場との関わり強化と現金の流通は、新たな欲望と購買意欲を生みだし、これが自然利用だけでなく、個人から村レベルまでのスペシャリスト化を生みだし、差異化へと走らせつつあると考えられる。

以上述べてきたように現在の民族誌から、まさに非集約農耕が中国的集約農耕の影響によって変容しつつあるシステムを分析し、その変容のメカニズムについて普遍化してきた。最後に、中国的集約農耕が、周辺地域の自然利用を変容させてきた歴史を考える上で、必要になるであろう視点について珠江デルタの例をとって述べてみたい。

珠江デルタでブタ便所＝中国的集約農耕が普及したのは、少なくとも前漢中期だったことが考古学的事実からも確かめられる。また珠江デルタに中国的集約農耕が移植される以前の自然利用の姿は、中国的集約農耕とは異なる、自然を複合的に利用する非集約農耕的な生活適応戦略だったと考えられ、おそらくその利用する動植物は異なっている、リー族が有していた共生循環システム的な自然利用ではなかったかと想定している。

珠江デルタへの中国的集約農耕の拡散は、基本的には中国的集約農耕のイデオロギーをもった人々の移住に伴うものだと考えた。そして珠江デルタでは最終的には、桑基漁塘という中国的集約農耕の究極の形態を作り上げていった。その発展の要因は、黄河中流域と同様に、制約された生態的環境のなかで、資源の有効利用と土地生産性をあげ人口支持率を高める必要性に迫られていたのではないかと考えている。つまり人口圧の存在であり、掛谷がいうところの集約農耕の特徴である「高人口密度型農耕」の必要性である。

ここで歴史的事実に立ち返ってみよう。趙佗が南越国を成立させた時期、都であった番禺の人口は不明であるが、武帝が南越国を制圧した元鼎6年（前111年）の人口は、漢書地理誌によれば番禺の戸数は、1万9千613戸、人口は9万4千253人を数える。

珠江デルタ周辺の4郡、番禺・鬱林・蒼梧・合浦の4郡をあわせても40万に満たない。当時の漢の都長安は、人口682,468人、樂浪は406,748人を数えたというから、番禺の人口は、大変低いようにみえる。

しかし中国南部に位置し「豊かな亜熱帯の地、広東省」というイメージとは裏腹に、現在でも珠江デルタ周辺及び広東省は、省総面積から換算すると他のデルタ地域と比較してはるかに可耕地の

面積が狭い。嶺南地方は、その大半が1000mの山地である。海に近くなるとそれが低い丘陵となって海まで迫っているため、雷州半島を除くと海岸部にはほとんど平野が発達していない。そのため、全省の70%までが山地になっており、沿岸部では、現在でも耕作地率が10~20%、山間部になると10%以下になる。このように嶺南地方は土地が非常に山がちのため、利用できるのは河川デルタに集中する。嶺南には、珠江デルタの他に大きなデルタとしては韓江デルタがある。ところが珠江デルタでさえ水路と丘陵が多く、1955年の調査でも実際に耕地となっているのは、およそ50%にしかすぎない。韓江デルタにいたっては、わずか30%にしかすぎない。

唐代の段公路が著した『北戸録』には、「南海の諸郡においては、郡の人々は八、九月の頃に池塘にいて稚魚をとってくる。…鯉などの魚を池塘で飼育すると、一年で食用に供することができる」とあり、唐代になってやっと珠江デルタ地域が開発され始めたといわれている。

ということは、前漢終わりから後漢にかけては、珠江デルタはマングローブに覆われ開発の手はいっていない自然の状態をたもっていたと考えられる。

さらに南越国が成立する前200年前後には、一時海水面が下降する時期も存在するが、全体的には気候が温暖化する時期にあたり海水面が現在より1.5mも上昇している〔李 1991〕。秦漢時代の珠江三角州の面積は、現在よりはるかに小さく、海岸線は順徳・容奇・新会を結ぶ線上にあったと考えられる。また珠江デルタの河川の流れが安定するのは、宋代以降の堤防や灌漑水路の整備の結果である。宋代以前唐代でも、西・北・東江が合流する珠江デルタは、河道が一定せず、いたるところで流路が変わり砂州が出現する不安定な状況であった。また「広州記」の記載によれば、唐時代の広州市内は珠江の支流が至るところに走っており、砂州に浮かぶ町といった状況を呈している。ちなみに秦から前漢時代の墓が、現在の広州市北側の象崗および越秀山周辺に集中していることも、周囲が低湿地であったためで、これらの小高い丘が利用されたのであろう。つまり戦国末期から漢代にかけて、漢人がこの地の大量に移住してきた時期は、番禺周辺の可耕地面積が、現在からは想像もできないほど狭かった可能性が非常に高いと考えられる。

この地域のブタ便所は、他の地域にはない特徴がある。それはブタ便所の形態が高床家屋型である点と、おそらく番禺など都市内部の家屋のほとんどが、この家屋型ブタ便所だと考えられることである〔西谷 2001〕。

都市内部にまでも、ブタを盛んに飼育する必要があった珠江デルタの当時の状況は、戦国末期から流入してくる人口圧を支えるため、家畜を都市内部の家屋の1階に閉じこめ、少しでも生産性を高めるといふ、結局は中国的集約農耕のもつ「動物の栽培化」という方法を必要としたのだろう。しかし都市は消費する場であり、本来食料を生産する場ではなく基本的には自給自足は不可能である。

こうした都市とその周辺の人口圧を支えるには、ブタなどの動物性タンパク質だけでなく、コメなどの穀物の増産が必要である。それを達成するためには、周辺地域の従来の非集約農耕地域の土地生産量をあげる必要がある。つまり集約的農耕への転換である。リー族の場合、集約農耕への転換として、ハイブリット米がコメの増産に大きな役目をはたしたと考えられる。戦国末期から漢にかけて、珠江デルタに、導入されたハイブリット米に相当する革命的技術、それが鉄製農具鉄器やウシの利用による犁、施肥の技術だった。考古学的にも、鉄製農具が、戦国末期から漢時代の遺跡か

ら出土し、特に漢以降珠江デルタを中心とした分布を示す。また少し時代は下るが、三国時代墓からは、ウシに犁を引かせた明器も出土している。

漢以前の珠江デルタの在地農耕は、盆地内やデルタの上端部などを利用した、おそらく天水農耕に近いものだったと思われる。灌漑施設や鉄器、ウシによる犁などが導入された地域では、おそらくハイブリット米を導入したのと同じように飛躍的な増産につながっただろう。つまり、自給自足的な穀物生産から、人口集中地域にも余剰作物を供給できるシステムへの変容である。

漢の成立とともに、高祖（劉邦）は使者を派遣し、趙佗を南越王に封じ南越国を外民族の藩国として認めている。ところが高祖の死後、呂后は南越国と対立し南越国への鉄の輸出を禁じた。これに怒った趙佗は湖南省に攻め入り、この地方を荒し回ったといわれている。当時、南越国では鉄の生産は自前ではできず、漢からの輸入に頼っていた。鉄製農具は、番禺周辺の農耕地で集約農耕をおこない生産性を向上させ人口圧を支える必需品であり、鉄の輸入を禁止されることは南越国の死活問題に関わったのではないだろうか。

さて従来の非集約農耕地で、当時の中国的集約農耕の必需品である鉄製農具やウシに引かせる犁を、従来の非集約農耕地が導入することは、結果として都市の市場原理が作用することにつながる。自給的な共生循環システムから市場依存システムへの転換である。

非集約農耕地を変容させるには、中国的集約農耕を普及させたい側からみれば、政治的圧力や軍事的行動などに頼らなくても、それほど難しいことではなかったのではないと考えている。つまり生産性をあげる新技術を広げるという、最初のきっかけさえ導入すれば、あとは市場原理が自然と市場依存型システムへと地域社会を変容させる方向へと働いたのではないかと予想される。リー族の村でおこっている自然利用の変容も、当初は受け入れる側が主体的であったとしても、一端集約的農耕の論理が受け入れられ、彼らの生活そのものが強く市場と結びつくと、多様な自然利用のジェネラリストの側面は容易に変容しスペシャリスト化していく。それは、焼畑・水田・野生動物狩猟などが相互に結びついた自給的な共生的循環システムが破壊されるからであり、そうになると自給的世界は維持できなくなり、反対に生きていくために市場に頼らざるを得なくなる。共生循環システムは、相互の生業が密接に絡み合ったリングを形成しており、その一部が壊されると自給的システムは維持できなくなる。なぜなら新たな価値観による欲望が増殖され、より都市の市場と強く結びつかざるえないからである。

戦国末期から漢代におこった、非集約農耕から中国的集約農耕への変容も、まず人口圧とその支持率を高めるための食料増産の必要性が背景として存在した。そして、新技術導入→コメなどの生産量の増大と余剰→従来の自然利用の変容→市場依存システムへの移行→自給的・自然利用の崩壊→中国的集約農耕という過程をたどったのではなかろうか。

中国的農耕文化が周辺地域に拡散するということは、つまり在地の自然利用が変容するということの意味しており、またそのことは、社会が根本的に変化することにつながる。西田正規は、文明社会（弥生社会）と素朴社会（縄文社会）の対比を次のように要約している〔西田 2001〕。「安定性の高い素朴な社会に対して、文明的社会はたえず不安定に変化しつづけ、歴史物語に格好の題材となるような暴動や反乱、戦争、飢餓、技術革新などの諸事件が頻発に発生する。したがって高い安定性を発揮する素朴社会は歴史と無縁の社会である。だとすると縄文時代を歴史的な枠組みに組

みいれること、あるいは歴史的視点から理解しようとするのがそもそも間違っていることになる。高い安定性をもつことが素朴社会の重要な特徴であるのなら、安定性を維持しえたメカニズムを理解することこそ、反歴史的な素朴社会の核心に迫る方向である」と述べている。

東アジアでは、戦国時代から漢代にかけて、周辺地域の多くの地域で、非集約農耕から集約農耕への変容や、または日本列島のように縄文社会から弥生社会のように農耕社会への転換がおこった。なぜ変容や転換がおこり、そのメカニズムはいったいどのようなものなのか。中国南部でおこった非集約農耕から集約農耕への変容は、人口圧・生産技術の革新と特定栽培種への特化・市場原理への変容・価値観の変化とスペシャリスト化が複雑に絡み合いあっていると考えた。今回提示した変容のメカニズムが、すべてに普遍化できるわけではない。また変容の複雑なメカニズムを明らかにするには、最終的には個々の社会がもっている環境・生業・社会の総合システムから考える必要があるだろう。しかしまずはそれを結びつけていた、例えば自然利用のシステム、つまり生活適応戦略そのものの構造比較をおこなうことが、変容のメカニズムを解明する一つの視点になろうし、それが社会の変容過程をより具体的に描く可能性につながるのではなかろうか。それには、今回提示したアーキエスノロジー的手法が一つの有効な方法論になるのではと考えている。

追記

今回の国際シンポジウムの主な目的は、東アジアにおける農耕社会や国家の成立を考える上で新たな視点を模索することにあった。それは従来の「日本への稲作伝播」などに象徴される、日本列島側からの問題意識で東アジアをみるという視点ではなく、東アジアの各国の研究者が、共有できる課題を設定したいということにあった。

その一つが「なぜ農耕がはじまったのか」「なぜ国家が成立したのか」という、従来考古学的ではあまり問題にされてこなかった「なぜ」という視点を取り入れることにあった。

本稿の内容は、シンポジウム発表時とは異なっている。それはシンポジウムのさいに与えられた国家成立とその周辺地域における変容という問題を、さらには歴史を「なぜ」学ぶ必要があるのかということをも、もう一度根本的に考え直したかったことに起因する。

アルビン・トフラーは『第三の波』のなかで、産業革命を「第二の波」、農業革命を「第一の波」と呼んだ。この言葉を中国の農耕の歴史にあえて例えるなら、農耕の開始は、第一の波であり、中国的集約農耕の拡散が第二の波といえる。そして今、長江デルタや珠江デルタに第三の波が押し寄せている。およそ2000年以上続いてきた中国的集約農耕の終焉である。今や珠江デルタや長江デルタは「世界の工場」とまでいわれるようになった。

珠江デルタでは水田や桑基漁塘をつぶし、埋め立て工場が建ち並ぶ。また爆発的に増加する都市のグルメたちを満足させるため、桑基漁塘の漁塘部分だけを広げて、広大な養魚池にすることで利潤の高い魚だけを専門に養殖し、水田ではコメ作りをほとんどやめ、都市向けの広大な野菜畑が出現している。

中国的集約農耕は、漢代以降、周辺地域の自然利用を大きく変容させてきた。しかし、皮肉にも今度は、巨大な世界規模の「集約農耕」が、長江デルタや珠江デルタの、人工的自然ではあるが循環システムを呑み込み、地球単位のスぺシャリスト化が進行しつつある。現在中国でおこっている

ことは、なにも中国の特殊な状況ではなく、日本でもまったく同じことがおこなわれてきたし、日本自身が東南アジアを中心として、世界規模でおこなってきたことでもある。

地球規模の環境問題がさげばれて久しい。しかし、市場のメカニズムは、どうみても将来の世代のことを考慮して動いていると思えない。過去の東アジアで繰り返されてきた、自然と人に関わる歴史的事実や、現在国家の周辺でおこなわれつつある自然利用の変容を知ること、現代の環境の問題に還元することが、もし可能ならば、いったい何がいえるのだろうか。

それは、ごく当たり前のことなのだが、地域の生活文化の多様性、人間社会の多様性を尊重するべきだという他ないだろう。なぜなら、環境保全には人間相互型の関係が不可分だからだ。結局のところは、「人と人の関係」が壊れるということは、「人と自然の関係」も壊れることに他ならないからである。

註

(1)——海南島は、北緯18°10′～20°10′、東経108°37′～110°03′にあり、中国南端に位置する。海南島は、熱帯モンスーン地帯に属しており、植生は熱帯から亜熱帯の様相を帯びる。面積は、日本の九州とほぼ同じ大きさであり(約34000km²)、人口はおよそ700万人である。海南島の主要なエスニック・グループは、海岸部の漢族、山間部のリー族とミャオ族であり、リー族は山間部を中心居住し、人口はおよそ100万人いるといわれている。海南島は現在一島で海南省となっており、省都は島の北側にある海口市である。海南島には、南側に三亜市という第2の港湾都市がある。

(2)——五指山市は、海口から南へ約220km、三亜市から北へ90kmの山間部の小盆地に位置する。五指山市は、北側には白沙黎族自治县、および瓊中自治県、西側には樂東黎族自治县、南側には保亭黎族苗族自治县に囲まれ、まさにリー族の中心地である。五指山市の周辺は、1000～1500mの山塊が連なり、そう

した山の山麓に多くのリー族の村がある。五指山郷と毛陽鎮間の昌化江支流に沿って多くの村が展開するが、初保村は、毛陽鎮からおよそ10km東にいき、さらに南から流れ込むナムハ川をおよそ2kmさかのぼったところにある。初保村は、海南省五指山市毛陽鎮牙合行政村に属する自然村の一つである。牙合行政村は、初保を含む、什冲・方満・什好・便文の5つの村からなっている。初保村の戸数は49戸で、人口246人を数える(2002年3月)。

(3)——1999年から4年間にわたって、学術振興会未来開拓学術研究推進事業「アジア地域の環境保全」(大塚プロジェクト)の一つである「地域社会に対する開発の影響とその緩和方策に関する研究—海南島班(リーダー篠原徹)」の調査地として、海南島五指山市の4つの村(初保・保力・太平・水満)で、自然と人の関係についての調査をおこなった〔大塚2000、篠原2000・2001〕。

引用・参考文献

- 安斎正人・佐藤宏之 1998「野ウサギ用仕掛け罠「アキピラ」の復元」『縄文式生活構造—土俗考古学からのアプローチ—』安斎正人編、同成社。
- 尹 紹亭 (白坂 審訳/林 紅翻訳協力) 2000『雲南の焼畑—人類生態学的研究—』農林統計協会。
- 伊藤貴子 2001「太平村のける生活文化に関する基礎調査」『アジア・太平洋の環境・開発・文化 No.3—特集 海南島、変貌する村落社会と環境—』未来開拓大塚プロジェクト事務局、東京大学大学院医学系研究科人類生態学教室。
- 伊藤貴子 2004「都市近郊農村のマーケット依存性」『中国・海南島—焼畑農耕の終焉—』東京大学出版会。
- 梅崎昌裕 2001「環境保全と両立しうる生業の可能性」『アジア・太平洋の環境・開発・文化 No.3—特集 海南島、変貌する村落社会と環境—』未来開拓大塚プロジェクト事務局、東京大学大学院医学系研究科人類生態学教室。
- 大塚柳太郎 2000「地域社会に対する開発の影響とその緩和方策に関する研究」『アジア・太平洋の環境・開発・文化 No.1』未来開拓大塚プロジェクト事務局、東京大学大学院医学系研究科人類生態学教室。
- 岡田 謙 1942『海南島黎族の社会組織』出版社不明(2001年、クレス出版復刻版)。

- 尾高邦雄 1942「海南島黎族の経済組織」出版社不明（2001年、クレス出版復刻版）。
- 郭文韜・曹隆恭・宋洪慶・馬孝劬 1989「中国農業の伝統と現代」渡部武（訳）、農山漁村文化協会。
- 掛谷 誠 1998「焼畑農耕民の生き方」『アフリカ農業の諸問題』高村泰雄・重田真義編著、京都大学学術出版会。
- 耕 隠 1986「我国家畜閹割技術発展」『中国畜牧史料集』科学出版社。
- 高 式武 1986「我国猪の起源和馴化」『中国畜牧史料集』科学出版社。
- 廣州市文物管理委員会・中国社会科学院考古研究所・広東省博物館 1991『西漢南越王墓』文物出版社。
- 廣州市文物管理委員会・廣州市博物館 1981「廣州漢墓」文物出版社。
- 甲元 眞之 1992「長江と黄河—中国初期農耕文化の比較研究—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集。
- 呉 永章 1997『黎族史』広東人民出版社。
- 篠原 徹 2000「海南島」『アジア・太平洋の環境・開発・文化 No1』未来開拓大塚プロジェクト事務局、東京大学大学院医学系研究科人類生態学教室。
- 篠原 徹 2001「生物多様性と連関する生計維持機構の多様性」『アジア・太平洋の環境・開発・文化 No3—特集 海南島、変貌する村落社会と環境—』未来開拓大塚プロジェクト事務局、東京大学大学院医学系研究科人類生態学教室。
- 篠原 徹 2002a「実践としてのエスノ・サイエンス—論文解題—」寺嶋秀明・篠原徹編 『エスノ・サイエンス』京都大学学術出版会。
- 篠原 徹 2002b「野生と栽培をつなぐ植物たち」『人間文化H&S』17号、神戸学院大学。
- ジャック・パロー 1997 「食の文化史—生態—民族学的素描—」山内昶（訳）筑摩書房。
- 蔣 宏偉 2001「換金作物栽培と出稼ぎの村における生業の現状」『アジア・太平洋の環境・開発・文化 No3—特集 海南島、変貌する村落社会と環境—』未来開拓大塚プロジェクト事務局、東京大学大学院医学系研究科人類生態学教室。
- 菅 豊 1998「閉じこめられたヒツジたち—中国江南農耕社会のヒツジ飼育から見た商品経済の発展—」『東洋文化研究所紀要』135、東京大学東洋文化研究所。
- H.スチューベル著、平野義太郎編・清水三男訳、1943「海南島民族誌—南支那民族研究への一寄與—」畝傍書房。
- 中南民族学院本書編輯組 1992 「海南黎族社会調査」広西民族出版。
- 張 建林・範 培松 1987 「浅談漢代的厠」『文博』1987-4。
- 西谷 大 1995「南越国と番禺」『古墳文化とその伝統』勉誠社。
- 西谷 大 2001a「豚便所—飼養形態からみた豚文化の特質—」国立歴史民俗博物館研究報告第90集。
- 西谷 大 2001b「黎族と縄文人の美食家たち」『食は異なるもの味なものの一食から覗いた中国と日本—』（財）歴史民俗博物館振興会。
- 西谷 大 2001c「山地住民の生業における山の垂直利用とその変化」『アジア・太平洋の環境・開発・文化 No3—特集 海南島、変貌する村落社会と環境—』未来開拓大塚プロジェクト事務局、東京大学大学院医学系研究科人類生態学教室。
- 西谷 大 2001d「家財道具調査」『アジア・太平洋の環境・開発・文化 No3—特集 海南島、変貌する村落社会と環境—』未来開拓大塚プロジェクト事務局、東京大学大学院医学系研究科人類生態学教室。
- 西谷 大 2002a「海南島リー族のネズミ捕獲弓」『動物考古学』18。
- 西谷 大 2003a「大きな鼠小さな鼠—焼畑周辺をめぐる小動物狩猟—」『アジア・アフリカ言語研究所』第64号。
- 西谷 大 2003b「野生と栽培を結ぶ開かれた扉—焼畑周辺をめぐる植物利用からみた栽培化に関する一考察—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第105集。
- 西谷 大 2003c「トリとネズミ—弾弓と鉄弓からみた焼畑をめぐる小動物との戦い—」『考古学研究室創設30周年記念論文集、先史学・考古学論究Ⅳ』龍田考古会。
- 西谷 大 2003d「イノシシとブター—海南島リー族の生業からみた家畜と野生動物利用に関する一考察—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第108集。
- 西谷 大 2003e「海南島と雲南の農耕民—自然の持続的利用の可能性—」『UP』9、371号、東京大学出版会。
- 西田正規 2001「縄文時代の安定社会」『縄文時代の労働と自然』『国立歴史民俗博物館研究報告』第87集。
- 馬 孝劬 1986「我国養猪業の幾個伝統特点」『中国畜牧史料集』科学出版社。
- 李 平日他 1991『珠江三角洲一万年來環境演變』海洋出版社。
- 劉 敦愿 1986a「我国舍飼養猪の起源問題」『中国畜牧史料集』科学出版社。
- 劉 敦愿 1986b「中国古代的養猪業—兼論農牧結合問題—」『中国畜牧史料集』科学出版社。
- 良 警宇 2001「国家作用と少数民族生計方式的變遷」『アジア・太平洋の環境・開発・文化 No3—特集 海南島、変貌する村落社会と環境—』未来開拓大塚プロジェクト事務局、東京大学大学院医学系研究科人類生態学教室。
- 渡部忠世・桜井由躬雄編 1984『中国江南の稲作文化』日本放送出版協会。